

第14回若者力大賞表彰式開催予定

2023年2月20日(月)午後6時半より
東京・六本木ヒルズ・ハリウッドホールにて

第13回若者力大賞
表彰式スピーチ
全容はこちらから

YouTube



2022年度上期活動実績

4月

- 9日(土) AJAFA-21 52nd TV Conference
- 15日(金) 第1回運営幹事会
- 17日(日) 新LEP生歓迎会
(ダイアログ・イン・サイレンス体験)
- 22日(金) 第1回理事会
- 30日(土) AJAFA-21 34th Executive Committee Meeting



5月

- 13日(金) 第2回運営幹事会
- 18日(水) 評議員会、
第2回理事会
- 25日(水) 第33回異業種交流研修会



6月

- 2日(木) LEP「Meet the people」
- 7日(火) つなぐ委員会
- 10日(金) リーダー育成・国際交流委員会
- 15日(水) 社会啓発委員会
- 16日(木) 第3回運営幹事会

7月

- 15日(金) 第4回運営幹事会
- 16日(土) AJAFA-21 53rd TV Conference
- 21日(木) 第13回若者力大賞表彰式

8月

- 11日(木) 第14回若者力大賞 第1回選考委員会
- 19-20日(金・土) LEP「18プロジェクト」
- 28日(日) 第14回若者力大賞
第2回選考委員会



9月

- 5日(月) AJAFA-21 PAMAJA
来日ディナー
- 10日(土) LEP「18プロジェクト」振り返り
- 15日(木) 第5回運営幹事会
- 24日(土) AJAFA-21 54th TV Conference

2022年度下期活動予定

10月

- 6日(木) 第14回若者力大賞 第3回選考委員会
- 20日(木) 第6回運営幹事会
- 24日(月) 第14回若者力大賞 審査委員会

11月

- 5日(土) AJAFA-21 55th TV Conference
- 11日(金) 第7回運営幹事会
- 14-20日(月-日) さくらサイエンスプログラム
(ベトナム人学生招聘)
- 24-27日(木-日) AJAFA-21 26th Reagional Leaders Forum
(クアラルンプール)

12月

- 1日(木) 法人会員懇談会
- 2日(金) 第3回理事会
- 4日(日) LEP研修遠足
- 10日(土) AJAFA-21 56th TV Conference
- 16日(金) 第8回運営幹事会

2023年

1月

- 20日(金) 第9回運営幹事会

2月

- 17日(金) 第10回運営幹事会
- 20日(月) 第14回若者力大賞表彰式

3月

- 4日(土) LEP修了式
- 17日(金) 第11回運営幹事会
- 24日(金) 第4回理事会
- 予定 さくらサイエンスプログラム
- 予定 AJAFA-21
35th Exective Committee Meeting

入会のご案内

当協会は、協会の活動にご賛同いただく皆様からのご支援で運営されています

【法人会員】600,000円(年間)

【個人会員】一口 5,000円

法人の方は、所得控除の適用となります(非課税扱い)。
個人の方は、所得控除・税額控除のいずれかを適用できます。
ご入会希望の方は下記ホームページよりお問合せください。

当協会のホームページはこちら



〒105-0002 東京都港区愛宕1-6-7 愛宕山弁護士ビル8F
TEL: 03-6441-0581 FAX: 03-6441-0582
web: <https://www.youthleader.or.jp> mail: day@youthleader.or.jp



若 者 力 は 明 日 の 社 会 の エ ネ ル ギ ー

YOUTH LEADER

Development Association for Youthleaders

2022 AUTUMN Vol.151



公益財団法人
日本ユースリーダー協会
DEVELOPMENT ASSOCIATION FOR YOUTHLEADERS

〒105-0002 東京都港区愛宕1-6-7
愛宕山弁護士ビル8F
TEL: 03-6441-0581 FAX: 03-6441-0582
web: <https://www.youthleader.or.jp>
mail: day@youthleader.or.jp

CONTENTS

社会啓発事業
第13回若者力大賞
表彰式スピーチ P.02-04

新任評議員の
スピーチのご紹介 P.05

リーダー育成事業
「18プロジェクト」
開催報告 P.06-07

2022年度活動 P.08



社会啓発事業 第13回若者力大賞表彰式スピーチ (抄録)

The 13th Youthleader Awards

表彰式は、7月21日(木)に六本木ヒルズ・ハリウッドホールにて開催しました。
スピーチの全文は公式YouTubeチャンネルで



◆開会挨拶(永野毅 審査委員長・当協会会長)



第13回若者力大賞表彰式ようこそ。受賞者の皆さん、本日は本当におめでとうございます。私たちはパンデミックでもう2年半も苦勞しています。そうかと思えばウクライナでは戦争が起きてしまった。地球環境が侵されて自然災害が多発しています。世界では様々な分断や格差も起きています。そして日本で一番大きな問題は、人口減少です。100年前は5000万人だった人口が、これから100年かけて日本の人口が再び5000万人に戻っていきます。ただし100年前の5000万人の高齢者比率は5%でしたが、90年後100年後は4割となり全く違う社会になります。

世界にも日本にも数多の課題がありますが、世界の若者が行ってみたくて憧れるような国に、日本が21世紀中に再びなれるか私は心配しています。日本の文化や自然、陰徳の精神や惻隱の情、地域地域の文化やお祭りなどの良さが世界に誇れるソフトパワーだと思うのです。そういうものを高めて、若い人たちが行ってみようという国に日本をしたい。決して簡単なことでありません。確実に言えることは、次世代の若い人たちが最も活躍しやすい、チャレンジしやすい、そういう日本を作ることができれば、決して将来は暗いものではないということです。

今日を受賞者の方々は、日本の未来を明るくしたい、地域を少しでも良くしたい、目の前にある課題を解決したい、そういう思いに溢れた若い人たちは。日本をそういう人たちが満たすことができれば、日本の将来は素晴らしいものになります。当協会は、地域地域で世の為人の為、あるいは周囲の人達を少しでも元気にしようと思って頑張っている若い人たちに光を当てたいと、今日までやってきました。今日は受賞者のお話を聞いていただいて、この会場に共感の輪を広げていただきたい。そして、この若い力、共感の輪を日本中に広げていければと思っています。

受賞者の皆さん、改めておめでとうございます。



ふくざわ ともひろ
福澤 知浩さん
株式会社SkyDrive 代表取締役CEO

『空飛ぶクルマ』で100年に一度のモビリティ革命を目指す

私は2014年から、モビリティ業界にもIT革命のようなイノベーションが欲しいと思いい車会社に勤務しつつ活動を開始しました。色々なアイデアの中で、空飛ぶクルマが一番楽しく社会貢献になると、土日を使って開発を進めました。大きなサイズの機体を安定して飛ばせるようになって、2018年に株式会社スカイドライブを設立しました。

2020年に、日本で初めて人を乗せた公開デモフライトを行いました。空飛ぶクルマはドローンと似た仕組みですが、航空機と同じ安全性を満たさなければなりません。それが国土交通省によって証明されると事業が開始でき、多くの方々に乗って頂きながらサステナブルに事業拡大する計画です。2025年の大阪万博でサービスをスタートし、その5年後10年後には当たり前空を移動する世界が始まると思っています。

空飛ぶクルマの社会貢献は、地上の移動からの解放です。今の移動は満員電車や渋滞や乗り換えなど大変さがあります。空飛ぶクルマはヘリコプターに比べて騒音も重さも1/3ぐらい。そして電気で動くので地球環境にも優しいのです。都内の多くのビルの屋上に「H」や「R」と書いてありますが、その中でヘリコプターが着陸できる場所は実は数か所です。これが空飛ぶクルマのように軽くて静かになると、その全部が利用できる可能性があります。すると日本だけでも最大10万か所ぐらいのポートがあり、日常的に空にアクセスできてストレスのない移動が実現できます。

当初は色々な方から「無理だ」と言われたのですが、なぜ無理かと聞くと、航空機エンジニアや飛行試験場などが必要だと分かってきましたので、周りの人に「何かありませんか?」ときいていくと、例えば豊田市が、野球場8個分のスペースを無償で貸してくださったり、航空機エンジニアの方々が「また日本でも航空機を作りたい」と入社してくれたり、そんな形で仲間が集まって今に至っています。

戦後、航空機が作れなくなってから多くのエンジニアが車の開発に従事し、車産業が発達しましたが、航空機は過去50年間で一機も日本から出ていません。50年ぶりの航空機が空飛ぶクルマと言う、車に近い形で実用化されることは、日本の産業にも大きなメリットだと思っています。皆さんが安全安心で楽しい移動ができる、そんな世界を目指して今後も活動して行きます。



かきうち としや
垣内 俊哉さん
株式会社ミライロ 代表取締役社長

私が本日評価を頂いたことは、支援をいただいている皆様と仲間のお陰です。骨の病気で歩けないことは、私にとっては悲劇であり不幸でした。しかし障害を価値へと変えていくことが必要、バリアはバリューへと変えていける。今はそう確信しています。そう気づけたのには先達の存在がありました。バリアバリューを体現した先達を紹介致します。徳川家9代目将軍、徳川家重です。家重の父は8代目名君吉宗です。嫡男として家重が生まれて、長子相続を世に示すべく、吉宗は家重に家督を継がせました。でも社会からは反発がありました。家重には脳性麻痺と言語障害があったからです。吉宗の意志は固く、家重も運命を受け入れました。まつりごとなど難しいとされた中、家重が意識したのは人を見極めることでした。彼は優秀な側近を取り立てました。田沼意次と大岡忠光という二人の側用人です。大岡忠光は家重の言葉を聞き分け幕臣に伝える、いわば通訳でした。彼は家重に人生を捧げ、晩年体調を悪くして一線を退きました。家重は大岡忠光が一線を退くと同時に、将軍を降りました。自身の限界を見極めることができているからです。障害がある、人一倍力を貸してもらわなければいけない、だからこそ自身を客観視できていたのです。彼の姿勢に学ぶべきことが多くあります。

社会には3つのバリアがあります。施設のバリアフリー化や、教育研修、DXの促進など、様々な側面から3つのバリアの解消を行い、障害のある方が頑張る未来を、これからの日本の為に残していけたらと思っています。



やまもと まさこ
山本 昌子さん
ボランティア団体ACHAプロジェクト 代表

児童養護施設出身者に嗜れ着撮影で『生まれて良かった』と感じて欲しい

私は生後4ヶ月から18歳まで東京都の児童養護施設で育ててもらいました。そこで家族のように育ててもらったので、自分の頂いた愛を次に繋げたいとこの活動をしています。親からの上手な養育が受けられない子どもの命を助けている方々に感謝を伝えたいです。

私には施設を出た時に進学という壁がありました。保育士の夢のためにお金を貯めて、専門学校に進学しましたが、20歳を迎えた時に周りの多くの子ども達が振袖を着ていました。私自身は親から愛されているかわからず、なぜ生まれてきたのか、という思いで死にたいという気持ちの強い時期でした。そんな私を見ていた専門学校の先輩のACHAさんという方が、「生まれてきてくれてありがとう」という思いから振袖を着せてくれたのです。その時に「私もいろんな人に思われている。一人で生きてきたのではない」という実感を持ってました。

そこで他の子ども達のために、寄付を募り、ヘアメイクさんやカメラマンさんに協力してもらって無償で振袖を着てもらおうというACHAプロジェクトを始めました。多くの方々に力添えをいただいて、今では全国に活動が広がっています。私をリーダーにしているのは、今まで力添えを頂いたたくさんのスタッフの方々だと思っています。この賞はその方々たちと一緒に受け取ったと思わせていただきます。

自分の隣の人が幸せかな、と考える。隣の人とのつながりを一つ一つを大事にする、それだけで世界が変わると思っています。



はむら たいが
羽村 太雅さん
手作り科学館 Exedra 館長

科学コミュニケーションで世界観の革新を起こす

私は千葉県柏市の空きアパートを一棟借りて、自分たちでDIYして2018年1月からExedraという手作り科学館を運営しています。科学の魅力を多くの人と分かち合いたいと、科学を媒介に多くの方と語り合う学生サークルを立ち上げたのが事の起こりでした。

私はアカデミアの世界から一歩外に出て、地球外生命をこの手で触ってみたいという自分の夢を叶えたい、多くの人に応援してもらいたいという思いで科学館を作りました。科学館は、古い2Kの単身用のアパートを二部屋繋いだ小さな展示室とその隣の実験室、それだけの広さです。しかし、中に入ると第一線で現役で研究している研究者が、最新の研究成果を紹介できる場になっています。また、展示物は自分たちで手作りしています。集めてきた標本などは、手で触れられます。

また私は、科学コミュニケーションが社会の課題解決に役に立てないかと考えています。

千葉県には、特定外来生物のキョンという小さな鹿が増えています。そこでキョンの革の利活用を始めました。キョンの革は柔らかくて、高級な手触りです。そこにキョンがどんな生き物なのかをイメージできるようなモチーフをつけて、名刺入れなどとして皆さんにお届けしています。またキョンの骨格標本は進化の歴史を学ぶ良い材料になります。多くの方が科学に興味を持ち、そこから学ぶことで、次の世代に新たな価値を紡いでいく、そんな取り組みをこれからも続けていきたいと思っています。

ユースリーダー支援賞・団体部門



NPO法人 Peace Culture Village
メアリー・ポピオさん Mary Popeo 共同創業者
山口晴希さん 平和教育事業統括ディレクター

広島平和記念公園で『平和』を次世代につなげる活動をしている

メアリー：私はメアリー・ポピオです。アメリカの学校では原爆について学ぶことはありませんでした。被爆者との出会いで、私の国が広島へ何をしたのか気づきました。

山口：私は、被爆3世の山口晴希です。私の祖父は被爆体験は一度も話しませんでした。私は平和学習は悲しくて向き合えませんでした。でも、海外で自分について話した時、人々は広島で起きた事を尋ねてきました。その時に「広島について話す責任がある」と気づきました。

メアリー：2016年に私はスティーブン・リーパーと共にPCVを立ち上げました。被爆者や広島若者たちと、持続可能な平和文化を創造するためです。平和な世界のために活動を続けてきた被爆者の方々を見て活動を始めました。しかし彼らの平均年齢は84歳です。子供達は、被爆者なしで核兵器の問題を自分ごとと考えることはできません。だからこそ被爆者若者が、広島へのメッセージを今世界に発信する必要があります。

山口：これまで平和活動はボランティアでした。それでは若者は活動ができません。そこで私たちは、PEACE DIALOGUEという対話を軸にした有償の平和教育プログラムを立ち上げました。仕事をしながら活動する社会人メンバーや学校の授業のない日に活動する学生メンバーと一緒に、持続可能な取り組みの第一歩を踏み出しています。仲間は10代20代が中心です。若い世代だからこそ、広島について学ぼうとしている中学生や高校生と同じ視点で一緒に考えて対話できます。

メアリー：77年経った今、アメリカ人である私と広島で活動する仲間たちが一緒に活動できることは奇跡です。平和は誰かが作ってくれるものではありません。私達一人一人に役目があります。私が被爆者の方の話聞いてこの活動を始めたように、PCVの若者たちのメッセージを聞いて活動を始める若者を増やしていきたいと思えます。

実行委員会特別賞



NPO Glocaland
おみじやのぞし
大見謝望さん 共同代表

離島やへき地の医療格差に真正面から挑みつつある

NPO Glocalandの共同代表の大見謝望です。沖縄県立宮古病院に勤務しています。Glocalandでは学生や社会人が共同で活動しています。Glocalandとは、グローバルとローカルを足し合わせた造語です。グローバルに物事を考えて地域で活動を起こす、そこにアイランドのlandをつけました。私たちは離島地域の医療の課題に取り組んでいます。

設立は2020年の7月末です。コロナでオンラインを使って全国や世界の人たちとつながれる環境になったので、離島医療や離島の暮らしに興味関心がある人達が集まることができました。その中で実際にアクションを起こしたい有志が集まってGlocalandが発足しました。

取り組みの内容は、①離島医療の現場の情報発信源をする「離島医療人物図鑑」、②離島の子供たちの教育に取り組む「シマナビnet+」、③離島に住む人たちの暮らしと医療との関係で見えてくる課題に取り組む「I-to-島(いとしま)」、④将来離島で働いてみたいと思う若

者たちをつなげる「くくるCREW」、の4つです。今の活動は全部オンラインですが、今後は対面でアイデアをどんどん出して活動の幅を広げていきます。今の離島の環境や状況は10年先20年先の日本の縮図です。過疎化や少子高齢化、資源も限られている環境も含めて、島の暮らしを良くすることは日本全国の医療や教育や暮らしを良くすることに繋がります。Glocalandとして、今後ビジョンを描いていながら取り組みます。

◆閉会の辞(熊澤匠 実行委員長)



実行委員長の熊澤です。受賞者の皆様本当におめでとうございます。

一年前の候補者選考時に、学生メンバーの「オリンピックもやるのか、観客を入れるのかははっきりしないし、政治も全然モヤモヤしてて、はっきりしない」というつぶやきでハッとしました。「そうか、学生からは世の中はそう見えているのか」と思いました。今も目を覆うようなニュースが、もう耳を塞いで隠れてしまいたくなるような暗いニュースの報道が続いています。先が見えない時代を感じます。でも今日は「光はこっちだ」と「価値あるゴールはこちらにある」と力強く指し示してくれる活動に、その活動を引っ張るリーダー達に会いました。それが受賞者の皆さんです。皆さんのリーダーシップの影にも、モヤモヤや葛藤がありながらも、苦しみや悩みを数々乗り越えているからこそ、この輝きを持っているということを感じました。世の中はすっきり晴れる日が来ないかもしれない。でもその中で、ここに光があるんだと、葛藤を続けながらも、こっちに答えがあるんだと、信じ続ける力、その力を我々は「若者力」と呼んで、それを讀んでいくことを、今後も続けて行きます。その力が、その光が、次世代を明るく照らしてくれることを、我々は信じているからです。

今日この会場にお集まりの皆さん、そしてカメラの向こう側で、動画を見ていただいている皆さんにも、今日のこのエネルギーを、この光を少しでも繋いでいけたことを信じて、第13回若者力大賞の表彰式を終了とさせていただきます。

新任評議員のスピーチのご紹介(要旨)

New Councilor Speech



いずもみつる
出雲 充様

株式会社ユーグレナ 代表取締役社長
(2021年11月18日 法人会員懇談会にて)

私は1980年生まれ、ミレニアル世代の先頭バッターです。ミレニアル世代やZ世代は、団塊世代の方々とは異なる価値観で生きています。私は大学一年生の夏休みにバングラデシュに行き、ムハマド・ユヌス博士に出会い、彼が創設したグラミンバンクでインターンをする機会を得ました。グラミンバンクがマイクロファイナンスの仕組みで、バングラデシュの900万人の農家の人々を救っていることに大変感銘を受けました。

一方でバングラデシュをはじめ世界で10億人もの人々が栄養失調で苦しんでいる事を知りました。帰国後、この問題を解決できる可能性を持った微細藻類ユーグレナ(和名：ミドリムシ)に出会いました。ユーグレナは植物と動物の両方の特性を持ち、人間に必要な59種類の栄養素を作ることができます。私たちは当時不可能だと言われていたユーグレナの培養に取り組み、2005年に成功させました。でも、ユーグレナという新しい素材を「聞いたことがない。他社の採用がない」という理由から、営業に行ってもなかなか受け入れてもらうことができませんでした。しかし2008年5月に501社目に出会った伊藤忠商事が「聞いたことがないから面白い。伊藤忠商事でプロデュースしてみよう」と言ってくれました。

日本は世界的にみても、若者とベンチャーへの支援が少ない国です。しかし、私はこの現状を変えていきたいと考えています。2025年にミレニアル世代とZ世代が生産年齢人口の半数を越えます。すると政治や投資行動や消費行動が変わります。この2025

年をめがけて変化を先取りする組織にならなければいけません。組織のイノベーションを生み出すために、普段話をする機会の少ないアウトサイダーの世代を組織に取り込もうと、18歳以下の学生に弊社のCFO(Chef Future Officer: 未来最高責任者)に就任してもらい、経営陣や社内のメンバーと議論を交わしてもらっています。最初に募集した時は私も「誰も応募してこないかもしれない」とヒヤヒヤしましたが、500件以上の応募があり、現在は3代目が活躍しています。

ミレニアル世代とZ世代のテーマは、デジタルとグリーンです。グリーンな社会を作りたいと、若者たちが色々なアイデアを持って日本中の大学で研究しています。そんな若者が皆様の所にアイデアや製品を持って訪ねて行ったら、「聞いたことがないけど、どうやったら社会の役に立つか一緒に考えよう」と前向きな視点で、是非皆様の持っている力を注いで下さい。



うるし しほこ
漆 紫穂子様

学校法人品川女子学院 理事長
(2022年5月25日 第33回異業種交流研修会にて)

品川女子学院は曾祖母が1925年に創立した女性のための学校で、関東大震災からの復興と共に「社会を支える女性を育てる」という理念のもとにスタートしました。祖父や両親も学校のために心血を注いで来ました。私も両親の影響を受けて、教師の仕事で「生きる意味」と感じて育って来ました。

大学を卒業して、教師として一旦は他校に就職しましたが、品川女子学院の経営の悪化を聞いて悩みに悩んだあげく、当時の教え子に事情を話して退職し品川女子学院に着任しました。当時は教師としての経験も3年しかなく、大したことはできないとわかっていましたが、品川女子の卒業生の母校が消えてしまうかもしれないという状況の中、身を削って学校を守っている人々を傍観していいのかと、決意しました。

1989年から始めた改革の結果は、入学志願者の大幅な増加という形で現れています。この間、最も私の心の支えとなったのが、世田谷学園の山本慧樞(えきょう)校長(当時)からの「目の前のできることから1個ずつずっとやりなさい。やり続けている間は、絶対につぶれないから」というアドバイスでした。

改革に当たって色々なことを工夫して変えていきましたが、変えなかったことが2つあります。「理念」と「人」です。理念とは、女性のための学校であることです。カリキュラムは大学進学をサポートできるものに変更して、女性も大学に進学する時代の流れに対応させました。人とは、私も幼いころからお世話になっている同僚の先生たちです。

先生たちがどのような事を考えているのかをコミュニケーションを良くとって理解するようにし、改革の仲間になってもらうために、どのように関わればよいかを考えました。自分の物の見方のクセについても掘り下げました。相手に対する自分の評価が、自分の物の見方に影響を受けていることがあるからです。そうして皆が一丸となって取り組むことができるようになって、この改革をやり遂げることができたのです。

リーダー育成事業「18プロジェクト」開催報告

Report on 18 Projects



8月19日、8月20日にLEP生(協会の年間リーダー育成プログラムに参加している大学生)主催の「18プロジェクト」を開催しました!
18プロジェクトとは、“ヒト・モノ・ケイケン”に出会うことを目的に、大学生と高校生、社会人との交流を実現したチャレンジプログラムです。高校生4名とLEP生8名が参加しました。(文責・レイアウト:LEP生)



開催日程	1日目	8月19日(金) 13:00~17:00	・開会式 ① 成人についてのワーク ② 大学生によるパネルディスカッション ③ 小室副理事長による講演会
	2日目	8月20日(土) 9:30~12:00	・ラジオ体操(朝活) ④ 夢ワーク ・修了式

1 成人について考えるワーク

まず大学生から、成人年齢の引き下げ、海外の事例、新成人への期待などについて講義しました。次に模擬投票を行いました。ここでは、大学生2人が環境党と経済党に分かれて党首として演説し、高校生が支持をする党へ投票しました。

その後、大学生チームと高校生チームに分かれてディスカッションし意見を1つにまとめました。

高校生の選挙に対するとっつきにくいイメージが払拭できたと思います。

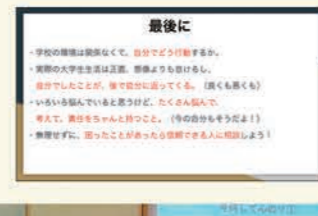
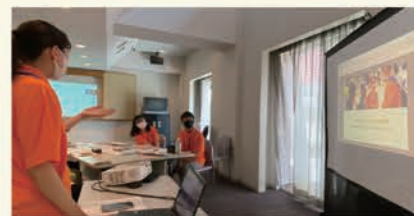


18歳からできること	20歳にならないとできないこと
契約ができる	飲酒
国家資格が取れる	喫煙
結婚	公営ギャンブル
性別の変更	中型以上の自動車免許
10年用パスポートが作れる	養子を迎える

2 パネルディスカッション

大学生が高校生に向けて「今に繋がる過去」をテーマにこれまでの体験や学びを発表しました。挫折についての話やGETに参加した話、また実習で自分が作った大きなネジを持参する

学生もおり、時間がオーバーするほど盛り上がりました。高校生にとっても漠然とした将来への不安や疑問が明らかになったことで、次の行動へ繋がるきっかけになりました。



私は
環境党・経済党・白票
を支持します。

なぜなら

だからです。

1日目の振り返りシート

感想・期待・印象に残った言葉など

疑問・疑問解決したいこと

大学生からコメント

▲このようなワークシートを作成し、高校生に活用してもらいました。(左:成人についてのワーク用、右:1日目の振り返り用)

それぞれの「今に繋がる過去」を発表

3 小室副理事長による講演会

学生と同じく「今に繋がる過去」というテーマで特別講義をして頂きました。高校生は緊張している様子もありましたが、4人全員が手を挙げて自分の言葉で小室さんに質問することができました。情熱を持って様々な事に挑戦されてきた小室さんの言葉は高校生にとって、年齢の近い大学生の話とはまた違う刺激になりました。



高校生に東南アジアの食べ物をお土産として配りました。



様々な言語のラジオ体操を聞きながら皆で体を動かしました。

1 夢ワーク

「夢宣言」を行いました。前半は宣言の準備として1年後の自分への手紙や、やりたいことリスト18を書きました。

高校生は1日目はインプットが多かった分、2日目のワークでは大学生との会話を楽しみながら取り組んでいる様子でした。

後半は、メインイベントの夢宣言。自分の夢を宣言することは少し恥ずかしい気持ちもありますが、2日間で仲良くなったメンバーに思い切って宣言することができました。

こんな人になりたい、こんな夢を実現したい、など個性溢れる素敵な夢が出来上がりました。



参加した高校生の感想(一部抜粋)

Q.特に印象に残ったプログラムは?

A.「成人についてのワーク」環境党か経済党の討論は高校生で意見が割れてまとまらなかったのですが、選挙に対して感じていた重たさが払拭されました。

A.「大学生のパネルディスカッション」沢山の経験を知り、これからどのように進路を決めれば良いかヒントになった。大学生の皆さんがやっている活動を知ることが出来た。

Q.全体を通してどうだった?

A.18プロジェクトを通して、様々な大学生と話せて沢山の刺激をもらいました。参加して曖昧だったことが固まり、いろんな変化を与えてくれました。

A.とても楽しかったです。良い刺激になりました。人との縁を今まで以上に大切にしようと思いました。

約半年かけて準備をしたプロジェクト。オンラインイベントの経験はあったものの、対面のイベントは初めての挑戦で、たくさんの苦難と挑戦がありました。しかし、その先にはたくさんの出会いと笑顔がありました!この機会がみんなにとって、「何か」のスタートになりますように!



▲今回運営・参加した大学生